

C-3 受け継いだ『いのち』の先に

私は大学生。でも周りとは少しだけ違う。私の心臓は、私のものではない。知らない方からの善意によって、いただいた心臓で生きている。小学6年生の夏、特発性拡張型心筋症と診断された。2014年7月目を覚ますと、そこにあるのは知らない天井。私の身体から伸びる赤々とした管。体外式の人工心臓につながっていた。水分制限、入浴の禁止、寝返りを打つことさえできないベッド上の生活、家族に会うことさえ難しい、そんな毎日が3か月続いた。1分1秒がこんなに長いなんて。2014年10月体外式から植込式補助人工心臓にする手術を受けた。歩くこと、シャワーに入ること、水分制限がなくなったこと、家族にも会えるようになったこと。できて当然、それが当たり前だと思っていたことが、特別なものに感じ、日常を送ることができる“ありがたさ”を知った。見落としていた幸せを拾った。2015年5月アメリカで心臓移植を受けた。指先まで伝わる鼓動。人工心臓がついていない私の身体。機械ではなく、自分の“ちから”で確かに動いている心臓。やっと戻ってきた。ICUで目覚めたあの日から、ずっと希望にしてきた“家に帰ること”。あと少し。頑張れ、自分。人工心臓で命を繋いだ10か月間、死と隣り合わせの毎日。いつ途絶えるのか、明日は来るのか、死の恐怖で押し潰されそうな日々を送っていた。しかし不思議なことに、幸せもより強く、鮮やかに、感じていた。確かに今、生きているんだ。いや、生かされているんだ。沢山の人の手によって救われた私の命。今度は私が救う側になりたい。自分と同じような境遇に立たされた患者さんやそのご家族に寄り添った、自分だけにしかできない心のサポートまでできるような、そんな臨床工学技士になりたい。小児の補助人工心臓治療に携わり、患者さんにも現場でも必要とされる、そんな人になりたい。私は大学生。周りとは少し違っているけれど、夢に向かって進み続けています。